

審査の結果の要旨

氏名 熊谷 晋一郎

本論文は二つの目的を持っている。一つ目は当事者研究という実践について、その歴史、理論および方法についての考察を行うことである。そして二つ目は、自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorders : 以下 ASD とする) の先行研究を概観した上で、課題を抽出し、当事者研究の方法を適用することでそれら課題の一部に応えることである。

第一章では、ASD に関する先行研究の網羅的検討から、① ASD 者の特性や人々のコミュニケーション様式には多様性があることを前提にした研究 ②内部メカニズムにおけるインペアメントを、社会との相互作用を主な場とするディスアビリティと区別しつつ詳細に記述していく研究 ③ 重要なアウトカムである主観的変数を考慮に入れた理論や経験的研究 の3つを課題として抽出し、当事者研究を ASD 研究に取り入れることが課題に応えるうえで重要であると提案した。

第二章では、当事者研究の歴史、理論、方法について考察した。まず研究と回復の両方を兼ね備えた当事者研究という実践を理論的に考察するために、真理論に関する哲学的な議論を概観した。研究とは真なる知識を得ようとする共同的な実践ともいえるが、真理論からは、1. 知識が現実と対応している (correspondence 条件)、2. 知識体系が内的な整合性を持っている (CKB 条件)、3. 知識が目的論的な枠組みに寄与する有用なものである (CKG 条件)、4. 知識が他者と合意されている (consensus 条件)、そして 5. 知識の獲得・維持・検索がコスト制約下で最大の効率性を発揮するものである (cost-efficacy 条件) という5つの条件が導かれる。この5条件と回復とを理論的に架橋するため、生物が病 (disorders) に抗して秩序の回復へと向かう傾向性を自由エネルギーの最小化として説明したフリストンの自由エネルギー原理から、5条件に近似する最適化原理が導かれる可能性を示した。さらに神経科学の先行研究をふまえ、5条件を維持する制御系の神経基盤として「帯状弁蓋ネットワーク (Cingulo-Opercular Network: CON)」と「前頭頭頂ネットワーク (Fronto-Parietal Control Network: FPCN)」の重要性を指摘した。以上を踏まえ、「類似した当事者同士の共同行動とコミュニケーションによって5C条件を満たした知識と意識を作り共有する」という当事者研究の定式化が行われた。

第三章では対象者についての記述を行い、対象者が自閉症スペクトラム障害の診断を満たしていることや、不安傾向、抑うつ傾向、反芻傾向、聴覚過敏、構音障害、PTSDの兆候を有していることが確認された。また自己記述からは、

他者とのつながれなさや、発声や識字の困難を経験してきたことなどが確認された。

第四章では、日常生活において生じるいくつかの逸脱事象を起点にして当事者研究を行い、「まとめあげ困難仮説」というモデルによって対象者の対人関係以前の特徴を明らかにすることを試みた。この特徴を第二章の記述系に当てはめ、対象者の制御系の特徴について、A. 予測誤差精度が高い。B. CON 下部構造と FPCN との機能的結合が弱い。C. CON 上部構造と CON 下部構造との機能的結合が弱い。D. CON 上部構造と FPCN との機能的分化が不十分である。という4つが推測された。

第五章では、当事者研究を行うことで生じた対象者の経験構造の変化に注目し、対象者の特徴の変わらない部分と変わる部分の境界線について考察した。研究によって他者像の侵入、フラッシュバック、反芻、不安・抑うつなどが著明に減少し、他者との共感や展望記憶などが増進する一方で、対象者の変わりにくい特徴として、カテゴリー化の稠密度の細かさが存続していることが示唆された。

第六章では、まとめあげ困難仮説を、ASD に関する三つの認知科学的な先行研究（心の理論障害仮説、実行機能障害仮説、弱い中枢性統合仮説）と比較した。心の理論障害仮説はメンタライジングの障害が根本的なインペアメントであると主張しているが、第一章に詳述した問題が残る。弱い中枢性統合仮説は、まとめあげ困難仮説のうち外受容感覚の予測符号化に関する部分と整合的であるが、内臓感覚の予測符号化や内臓運動の制御、目的指向的運動の問題についてはうまく説明できていない。まとめあげ困難仮説ともっとも親和性が高いのは実行機能障害仮説であるが、「計画」「柔軟性」「抑制」「生成」「自己モニタリング」といった実行機能の各構成要素に特異的な評価を行う課題が開発されていないという限界がある。

従来困難であった対象者との当事者研究を、制御系に関する知見とすり合わせることで、本論文では、ASD 者の経験と行動について包括的な記述とモデル化を試み、社会性やコミュニケーションの問題、こだわり行動といった表現型の原因の少なくとも一部として、予測誤差精度の高さというインペアメントが存在する可能性が示唆することに成功した。当事者研究を通じて本人の予測誤差精度に合った知覚・行動パターンや知識を生成し共有することによって苦悩の一部と他者とのメンタライジングが改善しうる可能性が示す成果をあげた。

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。